琉球大学学術リポジトリ

在日ウチナーンチュのアイデンティティ

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学移民研究センター
	公開日: 2019-07-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 城田, 愛, 金城, 宗和, 仲間, 恵子, 新里, 健, 町田, 宗博, Shirota, Chika, Kaneshiro, Munekazu, Nakama, Keiko, Shinzato, Ken, Machida, Munehiro
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010168

＜報告・記録２＞

移民会議記録
「在日ウチナーンチュのアイデンティティ」

城田　愛・金城宗和・仲間恵子
新里　健・町田宗博

琉球大学移民研究センターでは，2005年４月７日にスイスホテル南海大阪で開催された第９回ＷＵＢ世界大会において，ＷＵＢ関西支部，ＷＵＢインターナショナルの協力を得て，移民会議「在日ウチナーンチュのアイデンティティ」，ユースプログラム「トランジショナル・ウチナーンチュ・ネットワーク」の二つのフォーラムを開催した。以下は，移民会議の記録である。

WUB : Worldwide Uchinanchu Business Association

パネリスト紹介

城田　愛（しろた　ちか）
　大分県立芸術文化短期大学教員・文化人類学（発表時は日本学術振興会・国立民族学博物館研究員），大阪生まれ，青森育ちの沖縄三世

金城宗和（かねしろ　むねかず）
　金城塾経営・講師，元教員，大阪生まれの沖縄二世，ブラジル移住の経験あり

仲間恵子（なかま　けいこ）
　大阪人権博物館学芸員，北海道生まれ，川崎・大阪の沖縄二世

新里　健（しんざと　けん）
　京都新聞記者，沖縄県西原町出身，在関西の沖縄新一世

町田宗博（まちだ　むねひろ）
　琉球大学移民研究センター長・人文地理学，沖縄県北谷生まれ，コザ育ちの沖縄在住者

町田宗博　拝（ハイ）さい，御衆（グスー）よー。今日拝（チューウガ）なびら。我（ワ）んねー，琉球大学移民研究センターぬ，町田んでぃ言ちょーいびーん。宜（ユタ）しく見知（ミーシ）っちょーてぃうたびみそーり。今日（チュー）や，忙（イチュ）なさる中，此（ク）ぬ集（アチ）まいんかい，めんそーちくぃみそーち，いっぺー，にへぇーでーびる。遠方（カーマ），ブラジルから，ペルーから，ボリビアから，アルゼンチンから，多（ウホー）くぬ人達（チュヌチャー）めんそー来（チョー）いびーん。長旅ぬ疲（チカ）りん，くたんでぃん無（ネー）びらんがやーさい。

今日（チュー）や，「在日ウチナーンチュのアイデンティティ」，「トランジショナル・ウチナーンチュ・ネットワーク」でぃるテーマ掲（ア）ぎてぃぬ集（アチ）まいなとーいびーん。何（ヌー）が，今日（チュー）ぬ集（アチ）まい持（ム）っちゃがんでぃる次第（シデー），我（ワー）から一言葉（チュクゥトゥバ），うんぬきやびらんでぃ思（ウム）やびーん。

事（クトゥ）ぬ始まいや，去年（クジュ）ぬ四月（シグァーチ），今（ナマ）ぐるぬ清明（シーミー）ぬ節（シチ）やいびーん。ハワイから，ＷＵＢ起（タ）ち上ぎとーる，ロバート仲宗根さんが沖縄（ウチナー）んかい来（チョー）いびーん。ボブさのー今迄（ナママディ），琉球大学ぬ授業受きてぃ，

日本語ぬ読(ユ)み書ちうみはまとーいびーん。ボブさんぬ居(ウ)る場所(トゥクマ)とぅ我(ワン)とぅくま（移民研究センター）とー，隣近所(チュケートゥナイ)なとーいびーん。あんやいびーくとぅ，ちゃーゆんたくひんたくそーいびーん。うぬゆんたくぬ中うてぃ，ＷＵＢやビジネスする人達(チュヌチャー)が集(アチ)まとーしが，ビジネス以外(イゲー)ぬ人達(チュヌチャー)，法律ぬ仕事(ワザ)そーる人達(チュヌチャー)ん居(ウ)いびーん。医学ぬ仕事そーる人達(チュヌチャー)ん居(ウ)いびーん。また，儲(モウキ)じゅこーないびらんしが，我(ワー)ぐとぅし，物事(ムヌグウトゥ)きわみらんでぃる研究者とぅか，うぬ道ぬ専門家んでぃる人達(チュヌチャー)ん多(ウホー)く居(ウ)やびーん。世界(シケー)かい広がとーる，うぬよーな沖縄人(ウチナーンチュ)ぬ集(アチ)まいる場造(チュク)ららんがやー，ネットワーク作(チュク)ららんがやー。うぬよーな話，ひっちー言い返(ケー)し返(ゲー)し，繰(ク)い返(ケー)し返(ゲー)し，ボブさんやそーいびーん。

あんやいびーしが，此(ク)ぬよーな集(アチ)まい，初(ハジ)みから立(タ)ち起(ウ)くすんでぃる事(クトゥ)，どぅーやっさるくとーあいびらん。いっぺー大変(デージ)なくとぅやいびーん。あんしが果報(カフー)な事(クトゥ)にうまんかいや，ＷＵＢぬ人達(チュヌチャー)が，難儀(ナンジ)くんじし作(チュク)てーるネットワークがあいびーん。うぬネットワークんかい，ビジネス以外(イゲー)ぬ人達集(チュヌチャーアチ)みーる場造(バーチュク)いしが早(ヘー)さんでぃるくとぅんかいないびたん。うんぐとーる話しそーる内(ウチ)，関西うとぉーてぃＷＵＢぬ集(アチ)まいぬあくとぅ，うまうてぃ何(ヌー)がなせーんでぃる事ないびたん。あんしぇー，「移民会議」やれービジネスぬ人達(チュヌチャー)ん集(アチ)まいやっさい，とーしーんだんでぃ決みやびたん。若さる人達(チュヌチャー)んかいん「ユースプログラム」するくとぅ頼(タヌ)まびたん。

今日(チュー)ぬテーマ決みとーる次第(シデー)や，次ぬよーな事(クトゥ)なとーいびーん。今日(チュー)や，世界(シケー)ぬ各地(アマクマ)ぬ沖縄人(ウチナーンチュ)ぬめんそーちょーいびーしが，関西とぅか大和(ヤマトゥ)うてぃ暮らしむてぃそーいびーる沖縄人(ウチナーンチュ)ぬ事(クトゥ)，良(ユー)わからんでぃる声(クィー)ぬ聞(チ)かりてぃちょーいびーん。また近頃(チカグル)，南米とぅかから，日本かい仕事(シグチ)うみはまいが来(チュー)る沖縄人(ウチナーンチュ)ぬ子孫(クゥウマグァ)ん多(ウフ)くなとーいびーん。うんぐとーる事(クトゥ)やれー，「うぬよーな人達全含(チュヌチャームルフクミ)てぃ，在日ウチナーンチュのアイデンティティ，でぃるテーマやちゃーやがやー」んでぃ，去年(クジュ)までぃぬ移民研究センター長ぬ仲程昌徳先生(シンシー)ぬ言ちょーいびーん。大阪やれー，城田愛さぬん居(ウ)るむん相談しんだんでぃる話ないびてぃ，愛さぬんかい話されー，「うむっさぎさぬ」んでぃる事(クトゥ)なてぃ今日(チュー)ぬ集(アチ)まい持(ム)ちゅる事なとーいびーん。

国々様々多(ウホー)くぬ人達(チュヌチャー)が，様々な暮らし方そーいびーん。人人間(チュニンジン)ぬ，様々な考方(カンゲー)んあいびーん。うぬよーな中(ウチ)うてぃ，我(ワ)ったー沖縄(ウチナー)や，我(ワ)ったー沖縄人(ウチナーンチュ)やぬーさるむんやがやー。沖縄(ウチナー)や，沖縄人(ウチナーンチュ)てぃるむん，ちゃーあらねーならんがやーでぃしぇー，沖縄(ウチナー)に関わとーる人達(チュヌチャー)んかいや，いっぺー肝要(カンヌー)な事(クトゥ)んでぃ思(ウム)やびーん。色々(イルイル)な人(チュ)ぬ，様々な考持(カンゲーム)っちょーんでぃ思(ウム)やびーしが，今日(チュー)ぬ集(アチ)まいや，終(ウ)わいまでぃ残(ヌク)てぃくぃみそーち，場盛(バーム)い揚(ア)ぎてぃきぃみせーいねー，いっぺー果報(カフー)しな事(クトゥ)やいびーん。

今日(チュー)や，いっぺー，いっぺー，にへーでーびる。あんしぇー，城田さんう願(ニゲー)さびら。

城田　愛　町田先生，どうもありがとうございました。今の方がですね，コーディネーターの町田宗博先生です（拍手）。

それでは，簡単にほかのパネリストの方々の紹介をさせていただきたいと思います。町田先生のお隣りにいらっしゃるのが，今日の第一バッターの金城宗和さんです。宗和さんは大阪生まれで，ブラジルにも行かれた経験があり，大阪での体験をお話くださいます。そのお次が，仲間恵子さんです。恵子さんは大阪人権博物館で学芸員をされています。ご自身は北海道生まれの二世になられます。それで，私が三番目の城田です。大阪生まれの三世です。最後に，若

手の新里健さん。京都新聞の記者をされています。関西にお住まいです。今回，この４人で話をさせていただきます。

一人20分の持ち時間があります。時間の都合で20分，30分，40分も語れないんですが，この20分をきっかけに，今後の会話のスタート地点にできたらいいなと思います。最後に，皆さんからの質疑応答の時間として20分ございます。パネリストのお話を踏まえて，いろんな対話のキャッチボールができたらと思います。よろしくお願いします。では，まずは金城宗和さんから，よろしくお願いいたします。

金城宗和　失礼します。ブエノスタールデス，セニョール・エ・セニョリータ，ボワタールデ，セニョール・エ・セニョリータ。こんにちは，皆さん。ポルトガル語の挨拶だけ覚えておりましたので，久しぶりに使わせていただきました。今日は20分ほどですが，私の体験を含めて，大阪のウチナーンチュの様子を話したいと思います。私のレジュメは，都市コミュニティの同郷意識ということですけど，それに沿って話して行こうと思います。

私も大阪市大正区に生まれ育ちましたので，小さいころはウチナーンチュであるということは，別に普通のことだと思っていました。小学校1年生に入るときに，「なぜ，カネシロとキンジョウの二つの名前があるのかな」というようなことを考えるようになりました。「カネシロ」と私は名乗っておりますけれども，沖縄では「カナグスク」というのが本当の呼び方です。でも，父が戦前大阪に来たころ，1930年代に大阪へ来てるんですけども，そのころは「キンジョウ」というふうに名乗っていたそうです。で，戦後ですね，父が仕事を始めるときに，「カネシロ」という方がより日本的な名前なので「カネシロ」と名乗るようになったのです。私が物心ついたころには，キンジョウというのが自分の姓だと思っていたんですが，小学校1年生に入るときに，父がこう教えてくれたんです。「キンジョウじゃなくて，カネシロで名乗りなさい。キンジョウといわれたら，カネシロですと訂正しなさい」と。そう教えられて小学校１年生に入りました。

なぜ，そんなことをしたのかというと，戦前，父は鉄工所に勤めたくて大阪に出てきたそうなんですが，職工募集，職工というのは鉄工所の従業員のことを当時は職工と呼んでいましたが，「職工募集。但し朝鮮人，琉球人お断り」という張り紙がされている時代でした。ですから，日本に出てきたウチナーンチュは差別されないために，名前をより日本的な名前に変えていたのですね。そのせいで，戦後も1960年代，70年代になりましても，できるだけ日本的な名前で通して行こうと心がけていたのが，本土のウチナーンチュの処世術というか，世の中を渡るために取った手段だったと思います。

私の小さいころ，小学生，中学生のころの友だちの名前にも，例えば，ヘイアンナ（平安名）さんというふうに呼んでた友だちがいます。私はヘイアンナが正しいと思っていたんですが，沖縄へ行ったりしているうちにわかったのは，これはヘンナさん。クレヤ（呉屋）さんという人がいるんですが，これはゴヤさん。キヤタケ（喜屋武）さんが普通の名前だと思っていたんですが，実はこれもキャンさん。私の両親は今帰仁出身なんで，今帰仁ではキャンと言わずに，チャンというふうに呼んでました。チャンヤーという屋号の親戚もあります。そういうふうに，できるだけ日本的な名前にしていこうとして来たことが，本土での歴史のなかにはありました。

そういうことを，私も20年か30年くらい前にわかった次第です。

大阪が大きく変わる時期は，1960年代後半から1970年。大阪で万博が開かれた年です。今年は名古屋の方で，愛知県の方で万博が開かれてますが，1970年には大阪で，大きな博覧会が開かれました。そのころに大阪では高速道路ができたりですね，いろいろ大きく変わってきまして，大正区も立ち退き命令が出たりしました。我が家は，ブラジルへ両親と私のきょうだい４名合わせて６名が，1966年の12月30日ブラジル丸に乗って，ブラジルへ渡りました。

そこはサンパウロ市内で，フェイランテという露天商，バナナの露天商をしていたおじいさんおばあさんの家に，仕事をするということで行きました。私は当時小学校３年生だったんですけども，現地の小学校1年生に入りまして，アー（A），ベー（B），セー（C），デー（D）や，ウン（1），ドイス（2），トレス（3），から教わって，現地の学校に２年間通いました。何よりもブラジルで体験したことが，今の私の人生のなかでは，日本で住むにあたって，ものすごく有意義だったと思っています。

いくつかブラジルでの体験を話しますが，フェイランテというのは，わかりやすく言うと，夜店の屋台のようなものです。当時，1960年代のブラジルは，市場，商店街というのがあまりなくて，毎週，通りで屋台のようなフェイランテという商売の人たちが集まる市場が開かれていました。果物であったり，野菜であったり，肉であったり。で，うちのおじいさんおばあさんの家はバナナを売るということで，毎日，その日によって通りを変えて商売に出かけるんです。私も休みの日には，土曜日と日曜日にはその手伝いに出かけました。そこで，数とかいろんな言葉も学ぶようになりました。バナナにも値段の安い物から高い物までありまして，安い物を買う人たちと高い物を買う人たちと，ものすごくはっきりしているということを目の当たりにしました。だから，お金がある人ない人も差が激しいんだなというのを，その時にブラジルで感じました。

その後，このバナナの商売，また父の親族，いとこに当たる親戚なんですが，やっぱり生活してきた歴史が違いますので，うまく折り合いが行かないで，サンパウロ市内から少し離れたスザーノというところへ移りました。そこは少し片田舎になるんですが，そこでは最初は家もなくて，親戚の人にお願いして，同じウチナーンチュの島袋さんという農家の納屋を借りました。そこの部屋は土の上です。その土の上で３カ月ほど過ごしました。本当に最初は土間の生活から，そしてお金ができてから，段々レンガを積み，屋根を葺き，井戸も掘りました。ブラジルでの学校は午前中だけが授業でしたので，私も午後は家のレンガを積みました。

床がまだ土だったある日，父が親戚の人に「家の内装をしたり，床のコンクリートをしいたりするために，セメントを買うお金が無いので貸してほしい」と言いましたら，その親戚のおばさんに，父のお姉さんにあたる人なんですが，その人にこう言われたんです。「イッターヤ，クラハキンマニ，ヌーティ（あなた方は、鞍のついた馬に乗るつもりか）。自分たちのころはもっと奥地に入った。入植したころには，そんな今の，あなたたちのような生活じゃなくて，もっと厳しい生活をして来たんだから，まだ１年や２年で，そんな体験は苦しいもんじゃない。もっと辛抱しなさい」と突っぱねられました。そういう思い出があります。決してそのおばさんを憎んでるんじゃなくて，それが海外へ出て，あるいは初めて行く土地で，教えられることなんだということを，大人になって，今はよくわかるような気になっております。つまり，知

らない土地へ初めて行く人にとっては，そこで生活するということは非常に苦労が多いことです。でも，１日でも先に行っている人が，やはりそのなかで１日でも先輩なんで，その人たちの教えというか，その人たちの指示には，やっぱり郷に入りては郷に従えという言葉がありますように，ある程度，理解していかなければならないんだなということを，子どもながらに教わったような気がします。

で，現地での友だちも，黒人の友だちや白人の友だち，メスチーソの混血の友だちなど，いろんな人と出会いました。それが，今の私にとって，ものすごくプラスになっていると思います。裸足で学校へ来る生徒もいました。こんなこともありました。ある日，ガムを食べていたら「ムネカーズ，そのガムをちょうだい」と言う黒人の生徒がいたんです。「ごめんなさい。ガム，今もう全部食べちゃったから無い」と言うと，「いや，違う。あなたの食べているそのガムを，次に捨てるときに私にちょうだい」と言うんです。その時に，私は人の噛んだガムをまた食べるなんて信じられなかったんで，「これでいいのか」と聞いたら，「はい。いいよ」ということであげたんです。そしたら，また横にいる子どもが「次，俺に回せよ」と言うんですね。そういうふうな体験があるんです。それも，私にしたらものすごく貴重な体験だったと思っています。

その後，親戚とも折り合いがつきませんでしたから，ブラジルの習慣に馴染めなくて，結局は足掛け３年になりますが，３年後また日本へ帰ることになりました。私は小さかったんですが，姉たちは中学生や高校生になっていたんで，長い間大阪に住んでいましたので，また同じ大正区に戻って生活するようになりました。

で，日本での私の生活は，その後は普通にですね，中学校，高校，それから大学へと進んで。テニスが好きで，テニスばっかりしている普通の学生だったんですが，教員になりまして，大阪のある私立高校の教員になったんです。その時に，自分自身が授業をしたり，あるいはクラスの担任として生徒たちと接触するなかで，どうもうまくいかなった時期があります。

クラスには，在日韓国・朝鮮人の子どもたちもいますし，もちろんヤマトゥンチュの子どももいますし，被差別の部落の地域に住んでいる子どもたちもいます。その子どもたちと直接接触するときに，世界史や日本史の授業をするんですが，どうも生徒たちはおもしろくなさそうな顔をしている。なぜかなと考えたことがあります。

で，その時に気づいたのは，私という，金城宗和という私が，本当に目の前にいる子どもたちに伝えられているだろうか。つまり，世界史や日本史の授業をしながらなんですが，本当にそれを生きた人間の歴史として，この目の前の子どもたちに語っているだろうかと考えたときに，どうも何か本当の自分がいないような気がしました。本当の自分をはっきり持たないと，子どもたちに自分の言っていることは伝わらないんじゃないか。「本当の自分は一体何なのか。」と考えました。そうすると，自分をつくってくれたのは，お父さんであり，お母さん。父であり母であり，そしてその父や母が影響を受けているのは，おじいさんでありおばあさんであり，そういうものを知って，自分が何なのかということを調べようと思いました。いろいろ調べていると，自分はなぜ人の前に出たらすぐに顔を赤らめて恥ずかしがり屋なのかなとか，どうして言葉がはっきりと人の前で言えないのかなとか考えたら，自分は，どうしてもウチナーンチュであるということに誇りを持っていなかった。沖縄の歴史を勉強したり，また，地域の人に沖

縄のことを聞いたりして行くなかで，やっと自分というものはやっぱりウチナーンチュなんだ。ウチナーンチュには素晴らしいものがあるんだ。素晴らしい歴史があり，素晴らしい文化があるんだということを認識したときに，初めて自分に自信が持てるようになりました。それからは，けっこう子どもたちにも，オープンに話すことができるようになったと思います。その時に，自分としてはうまく授業ができるようになったと思えるようになりましたし，クラスの運営もうまく行くようになったと思います。

そういう意味で，自分がウチナーンチュであるということが誇りに思えたことが，私にとって，最も素晴らしかったと思います。ただ，その誇りに思うことのなかには，先ほど言いましたブラジルで体験したことのように，どうしてウチナーンチュはブラジルにたくさん移民で行ったんだろうか。ハワイやアルゼンチンや多くの海外，ペルーにも行きましたし，どうして多くの人々が，海外へ行ったんだろうかと，そういうこともやっぱり考えました。どうして大阪の大正区や西成区や此花区や港区，こういう地域に多くの人々が住んでいるんだろうかということも考えました。それは，沖縄が日本という大きな社会の中で，琉球という別の歴史をもっていて，明治以降，日本の一部にはなりましたが，社会の構造のなかで，マイノリティ，差別される側に置かれていたからだと思います。逆に，本土に大正区や此花区や港区や西成に多く住んでいるのは，それは人が来ても仕事があるからです。仕事のある場所に，人間は移動して来ますので。仕事を求めて出る原因は，沖縄が日本経済の中で，労働者が出て行くように仕向けられたというか，そういう社会構造のなかにいたということです。大阪や福岡や神奈川に多く住むのは，それは引っ張ってくる理由が，要因があったということもいえると思います。

そんな大きなことは別にしまして，私自身，今現在ですね，47歳になりますが，高校はもう辞めまして，地域で塾をやって，中学生や小学生も目の前にして毎日勉強しているんです。大正区には約８万人の人口のうちの２万人ほどがウチナーンチュだと言われてますが，そこで，エイサー団というものを，３年前に結成しました。

もともと，大阪大正区沖縄子ども会というものがあったんですが，一時期中断していまして，それを名称を変え，エイサー団ということで，沖縄の子どもたちに歴史や文化を教えることはもちろんですけども，まず身体を使って自分たちの誇りの持てる文化を表面化できるようにということで，エイサーからスタートし，一つのグループをつくっています。そこには現在，毎週第一，第三土曜日に，１時間ほどですけれども，30名ほどが，いつでもやって来ます。５歳，６歳くらいの子どもが多くて，親の方が一生懸命エイサーを踊るという状態になっていますが，春や秋になりますと，地域で催しがあるところへ呼ばれて踊りに行ったりしています。私の子どもも，その中の一人ですけれども，子どもたちは，エイサーやサンシンをしたりするなかで，確実にウチナーンチュであることを誇りに思うアイデンティティを形成していると思います。

最近は，ガレッジセールとかお笑いの世界も，歌では夏川りみとか，いろんなタレントも多く出ました。ウチナーンチュであるということを，うちの子どもなんか見ていると，「いいやろー，沖縄や」。田舎が沖縄だということを，「いいだろう」というふうに自信を持って言いますが，私たち40代，50代までのウチナーンチュ二世にとっては，あんまりかっこいいことではなかったんです，実はね。でも，最近私は，この三世の世代にあたるこれから大きくなって行く子どもたちには，かつて沖縄が持っていた歴史，それからかつて差別された歴史を含めて，

これは自信をもって子どもたちに伝えて行くべきことだと思っています。良いことばかりだけが歴史じゃなくて，良いことも悪いことも含めて，子どもたちに伝えて行くことが，我々二世の役割だと思っています。そんな調子で，また今日は帰って，子どもたちと塾で勉強をする予定もあります。以上で，私の報告は終わりたいと思います。ありがとうございます（拍手）。

城田　金城宗和さん，すてきな報告をありがとうございました。引き続き，仲間恵子さんにお願いいたします。

仲間恵子　仲間恵子です。肩書きが大阪人権博物館学芸員となっておりまして，城田愛さんからもこういうところで働いていると紹介がありましたので，どんなところかということを最初に話したいと思います。

この難波のホテルからタクシーに乗ったら，10分くらいのところに建っている博物館です。人権，ヒューマンライツをテーマとした博物館で，1985年に設立されました。1995年にリニューアルオープンをしました。現在は，今年の12月４日のオープンに向けて準備中ということで，休館をしております。たくさんの方が海外から来られているので，ぜひ観ていただきたいなと思いましたが，残念ながら，展示を観ていただくことができない状態です。

人権博物館は，1985年の設立以来，被差別部落をテーマとした常設展示をしていましたが，1995年のリニューアルの際に，「民族と列島の南北」というテーマで，沖縄（ウチナーンチュ），アイヌ民族，在日コリアンのコーナーを新たに設けました。そのほかに，「性と家族」では女性問題，「身体文化と環境」では，障害者，環境の問題などを，95年以降，常設展示として展示をしています。私はその中で，沖縄のコーナーを担当をしています。

新たな展示を現在，準備しているわけですけども，まず，展示をするというのは非常に難しいなと思います。人権，差別の問題は，人間の歴史，人の生きるすがたを展示するということでもあり，非常にナイーブなことに切り込んでいくことだと思います。一人一人それぞれ違う顔をもち，それぞれに生きている人を，カテゴリー化して展示するということは非常に恐くもあり，難しいことだと思っています。ここに，在日ウチナーンチュとして４人並んでいますけれども，それぞれ，考え方も違うと思いますし，それぞれのウチナーンチュというアイデンティティの持ち方も違っているわけなので，そういったことを展示していくのは非常に難しいことだと日々痛感しています。そういうところで働いています。

宗和さんがおっしゃったように，自分とは何者かということで，アイデンティティ，ウチナーンチュであることを探っていったという話がありましたが，これは私もまったく同じです。私の資料で，琉球新報に書いたもの「『仲間』という姓」と「オートロ，ハポン」をお配りしていますけれども，私は金城宗和さんのように，大正区というウチナーンチュがたくさん集まって暮らしているコミュニティーに生まれ育ったわけではありません。紹介でもありましたが，北海道の千歳市というところで1965年に生まれました。

私の父は，金武町の出身です。その父親がなぜ，北海道まで行っているのかということが，私が千歳で生まれたことにつながっていきます。私の父はフィリピンのダバオというところで生まれました。祖父がダバオに移民をしていたのです。戦後，自分の父親の故郷である金武町

に戻って暮らし，1960年代に，パスポート，渡航の身分証明書ですね，復帰前ですので，それを持って本土に働きに来たという人です。その時，米軍基地を転々としながら働く場を求めたようで，沖縄を出たにも関わらず，基地を転々として働いていました。北海道の千歳という地には，当時米軍基地がありまして，そこで仕事をしていた時に，私が生まれたということです。千歳の米軍基地は現在，自衛隊の基地になってます。自衛隊の基地になるとともに父は職を失いまして，神奈川県の川崎という街に，家族と出てきました。

仲間という姓について，北海道にいるころ，８歳くらいまでですが，そのころは，私は別に嫌な苗字だなとか思ったことはまったくありませんでした。けれども，川崎に来てから，変な苗字だと小学校の同級生の間で言われるようになりました。転校生だというおもしろさもあったんだと思います。それで，非常に嫌な苗字だなと思うようになりました。鈴木とか佐藤とかだったらいいのにと子どもながらに思っていました。今は，仲間由紀恵さんという女優さんがいるので，そういうことをいう方もいらっしゃらなくなりましたが，仲間という苗字が本土では珍しかったということがあったせいか，からかいの対象にもなって，非常に嫌だなと思いました。

川崎では，沖縄の人が多いところには住んでいないのですが，「仲間」という表札をみて，同じアパートに住んでいる人が，「沖縄ですねー。うちもですよ」と訪ねて来て親しくなるということが何回かあったのと，父親の同級生が，川崎にたくさん働きに来ていましたので，そういう人たちが家に出入りするということで，まず家族を通して，沖縄を体験していくというようなことが，川崎に来て増えるようになりました。川崎での生活は貧しく，出入りする沖縄の人たちも決して裕福な生活ではありませんでした。父親の同級生は，村の言葉で会話をするので，私にはまったくわかりませんでした。沖縄というのはどういうところなんだろう，日本とは若干違うんだろうなというようなことを，子どもながらに感じていました。それは，本当に自覚のない沖縄との出会いというか，家族を通してということでした。

私が，沖縄を自覚的に意識するようになったのは，18歳，19歳くらいのころです。「オートロ，ハポン」に書いていることですが，学生のころに，祖父のフィリピンの移民の体験を聞き取りをして，卒論にまとめるということがありました。その祖父の話を聞いていきながら，沖縄の歴史を自分なりに勉強して，日本とは異なる歴史や文化をもっているということを知ります。それまで私は当たり前に，日本人だと思ってきたわけですけれども，なんか足元からグラグラ揺らいだような感じで，ウチナーンチュとはなんだろうとか，私は何者だろうというふうに，考えざるをえないような状況がありました。それから，ヤマトゥに住む，本土に住むウチナーンチュのことをもっと知りたいと思うようになりました。

そのころ，私は横浜に住んでいました。横浜には鶴見というウチナーンチュがたくさん住んでいるところがあるのですが，私は接点を持っていなくて，恩師の紹介で大阪に来ました。そして大正区の沖縄料理屋さんで働いて，さまざまな人に出会って，集住地区で形成されるアイデンティティというか，人のつながりというものを肌で知っていくことになります。それが，今の仕事につながっていると思います。

仕事をしていくなかで，では，本土の，大阪のウチナーンチュの歴史というのはどのようなものなんだろうということで，当時の資料を探したりしました。1924年に，沖縄人は団結して

差別と闘い，互いに助け合っていこうというスローガンを掲げ，関西沖縄県人会という組織が結成されています。これが共同体の運動としての出発点です。時代によってかたちは変えていますが，今日に至るまでウチナーンチュの同郷人組織は続いています。1920年代は，関西におけるマイノリティの差別撤廃運動の組織が立ち上がる時期です。差別があったが故に誕生したのが，1924年に結成された同郷人の組織，関西沖縄県人会であったのだと思います。

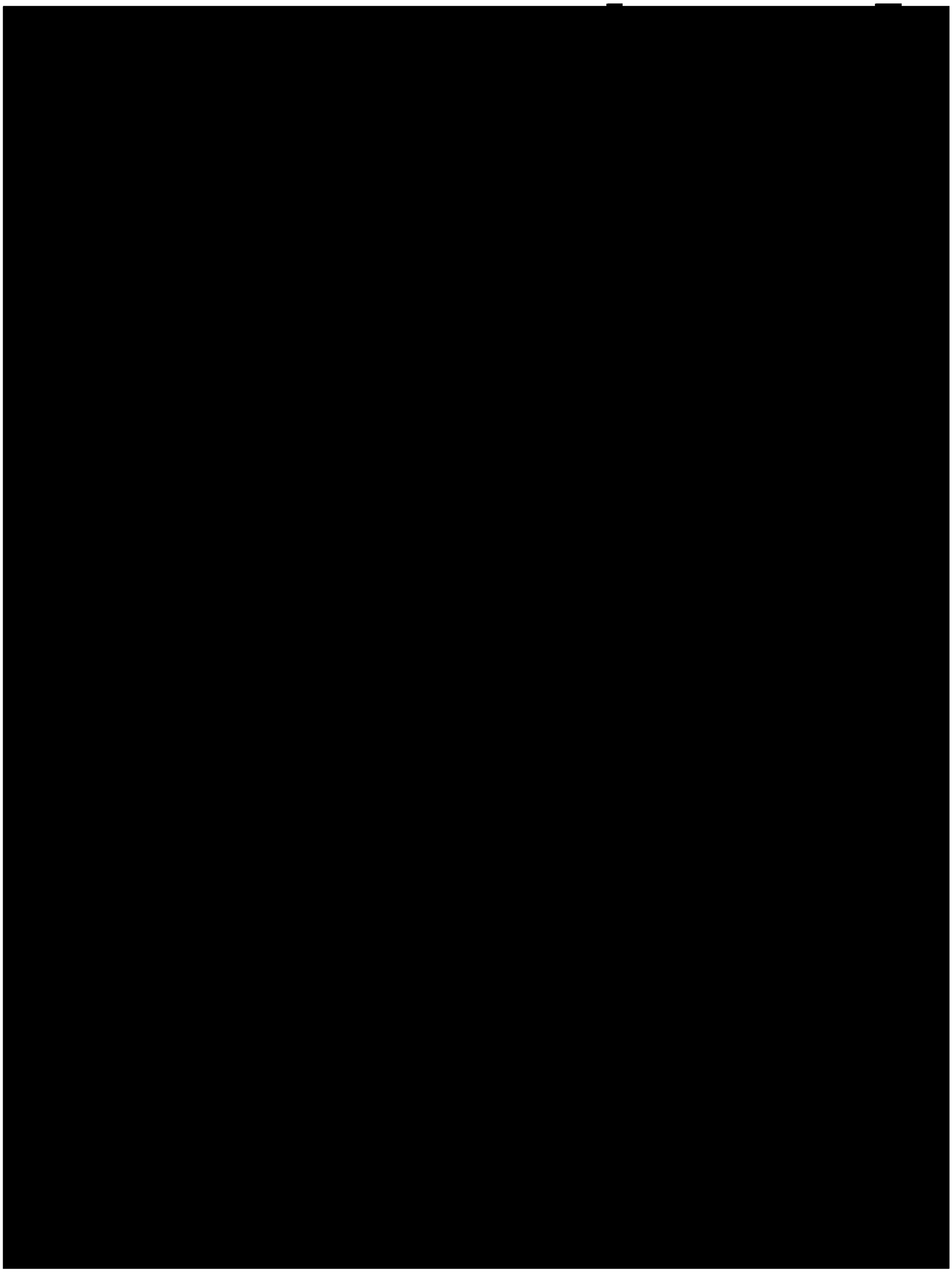
海外からのお客さんもいらっしゃるので，日本に住む私は，日本では，「○○人である」ということをどのようなかたちで認識しているのか，本を読んだり，講演を聞いて考えたことですが，日本人ということと，日本国籍ということと，日本語と日本文化。この４つが一体となっているのが，日本人だというふうに思っている方が，実は多いのではないか。「あなたは何人ですか」というふうに聞かれて，「日本人です」。「じゃあ，その根拠は何ですか」と聞かれたときに，あまり明確に答えられない場合が多いのではないか。この４つを漠然と前提にしているのではないか。日本というのは，そのような国ではないかと思います。

そういう国に生きるウチナーンチュというのは，どういう存在だったのかなということを考えます。それが，自分とは何者であるかとか，ウチナーンチュとは何だろうというように私が考えた，違和感を感じたことの要因でもあるのかなと思います。日本人だと思っている方は，なぜ，日本人だと思うのかを，深く深く考えて欲しいと思います。それは「琉球人」，「沖縄人」，「オキナワン」「オキナワ」と呼ばれた私たちの先輩や，私自身からすると，では，あなたは何者なのかという問いに向き合ってもらいたいということです。自分が何者なのかというのは，沖縄，ウチナーンチュだから考えるということでもないと思います。でも，私はウチナーンチュというところにルーツがあったからこそ，考えたのかなとも思います。海外の国とはこういうところが違うのでしょうか。

在日ウチナーンチュのアイデンティティは，非常に難しいテーマですけれども，日本という国で「日本人」という意識を形成している単一幻想的なものが独特なものが，少なくとも背景にあるのではないかと思います。そういうなかで，在日ウチナーンチュのアイデンティティは，少し歪んだり，いびつなかたちで，常に沖縄にこだわりながら形成されているのかなというふうに考えます。では，以上です（拍手）。

城田　ありがとうございます。あの，すごい優秀ですね。20分以内にちゃんとまとめていただいて。申し遅れましたが，今回の企画は，先ず，町田先生から私に電話がかかってきてですね。好きなようにパネリストの４人を組んでくれて結構と言われまして，大阪，関西に住んでる４人の知り合いの方にお願いしました。仲間恵子さんとは，９年くらい前，1996年くらいにハワイのオキナワン・フェスティヴァルでお会いしています。その後，私が留学先のハワイから帰国し，大正区のエイサー祭りで，金城宗和さんとお会いしました。恵子さんと宗和さんのお二人は，16年，17年のお知り合いということです。また，２年前，ここからすぐのところなんですけど，日雇い労働者の方々が多く集まる釜ヶ崎地区の三角公園で，32年間，これまで32回続いてきた盆踊りという，私にとっては初めて参加したので，いろいろな意味でショッキングな［刺激的な］ところで，［関西沖縄文庫などのメンバーで沖縄そばの出店をだした際に］新里健さんと会いました。それで，今回引っ張り込んで，こういうフォーラムを組ませていただいて

おります。それでは，続いて，私の発表の方に入らせてもらいます。じゃあですね。今度は，パソコン［パワーポイント］を使って紙芝居的にお話をさせていただきたいと思います。



[redacted]

[redacted]

[redacted]

[redacted]

[redacted]

城田　それでは，最後に，このパネルの最後に新里健さんに，若手代表でお願いしたいと思います。

新里　健　どうも，はじめまして。私，今，新聞社に勤めています。沖縄県は西原町出身で，大学から，関西。具体的には京都に出てきまして，もう丸８年になりました。新里健と申します。よろしくお願いいたします。今日は，僕が沖縄を出てきてから，８年間どういうことを感じ，どういう人たちと出会って，これまで来たのかということを中心に，ちょっとお話できたらと思います。今日のパネリスト紹介のなかにですね，私の短い紹介文のところに，在関西８年の新一世というかたちで紹介されているわけです。で，これまで宗和さん，仲間恵子さん，城田さんのお話でわかるように，一世というのは，沖縄生まれの沖縄育ち。言えば，100％のウチナーンチュっていうんでしょうか。そういうひとつの意味合いをもったその紹介のされ方だと思うんですけれども，あとでゆっくり話しますけど，ちょっと僕は，その自分が一世であるというような紹介のされ方に，ちょっと戸惑いを感じながらいつも受け止めているわけです。その理由をいろいろ説明していくかたちでのお話になると思いますので，よろしくお願いします。

まずですね，僕は沖縄に生まれまして，高校，浪人まで，19歳まで沖縄にいたわけです。高校ができて，今年でちょうど20年くらいになるんですかね。開邦高校というところでして，これが，どういう高校かといいますと，いわゆる県立の進学校。復帰後しばらくまでは，沖縄には国費による進学制度というものがあったそうで，それは本土の大学に学生を送り出し，国が学費などを補助して進学させるという制度だったそうなんです。沖縄で選抜をして，成績優秀

だった人から順に，どこどこの大学，どこどこの大学というかたちで，国のサポートでもって送り出していく制度だったそうなんですが，復帰後，打ち切られました。打ち切られると進学実績というのは，やっぱりガクンと下がったそうなんですね。で，地元から，本土の大学に人材を送り出せるような高校をつくらなくてはいけないという要求があって，進学校ができたそうなんです。そういう高校で，３年間学びました。朝から夕方まで，学校の中に缶詰で，ひたすらお勉強させられるというような３年間だったわけです。そうした高校を出て，京都の大学へと進学したわけです。

京都に出てきて，数年間の大学生活を過ごして来たわけです。日常ですね，人間関係などにおいて，自分が沖縄だから，例えば不利益を受けるですとか，いわゆる差別されるとか，そういった経験は，僕自身の感覚のなかでは，とくになかった。いわゆる沖縄ブームというのが，すでに高揚している時期でして，沖縄といえば，何かこう，かっこいいみたいな。私，沖縄好き好きと。そういうリアクションってのを常時受けながら過ごしてきたわけです。だから当然ながら，宗和さんがおっしゃったような，沖縄出身であること，ウチナーンチュであることを出しにくいとか，そういった意識というのは僕のなかにはなかったわけなんですよね。沖縄と内地，ヤマト。違う違うっていってるけど，本当に違うのはどこなのかなということが，自分でもあまりわからず，意識しながらも何年か過ごしたんです。

僕にとって非常に大きなインパクトだったのは，大正区を訪れて，そこで暮らす一世ないし二世の方々のいろんな被差別体験，あるいはいろんな苦労というのを聞いて，直接会って聞いたことだったんですね。その辺りの詳しいお話というのは，金城さんもされてたと思うんで，ここでは詳しくは述べません。最初，率直にびっくりしたのが，先ほども少しお話がありましたけれど，沖縄から大阪に出てきた人々が，名前の呼び方を変えているんですね。キンジョウがカネシロになり，ゴヤがクレヤになり，これは，僕にとっては非常にショック，驚きとともにショックでした。これは，いわゆる在日韓国，朝鮮人の人たちが経験したいわゆる創氏改名というんでしょうか。それ以来ですね。大阪の一世，二世の話を聞きました。彼らはやっぱりいろんな苦労をするなかで，例えば，復帰運動のなかで，在日コリアンですとか，あるいは部落解放運動の方々と一緒に闘ってきたという歴史の話なども聞くなかで，そこで初めて沖縄人，もしくはウチナーンチュというのをマイノリティーなのではないかなと，そこで初めて気づく。もしくは気づかされたわけなんですね。

その辺りの経緯というのは，今日は私が，資料で用意させてもらいました新聞記事の中にも，随所に出ているところだと思うんです。そういう一世なり，二世のいろんな苦労，被差別体験というのを聞く一方で，僕自身も沖縄生まれで，沖縄育ちで，沖縄から出てきたということで，例えば金城さんのような二世からはよく，一世と呼ばれたりするわけなんです。先ほど僕が，戸惑いといったのは，そこなんですね。僕自身，先ほど町田先生が最初に挨拶してくれたウチナーグチでの挨拶ですね。僕もよくわからなかったんですね。単語レベルでは，ちょいちょいこう聞き慣れた言葉が出てくるんですけれども，この部分は何のことをいってるのか，方言がまずわからない。

で，これは，僕自身，幸せなことかも知れませんけれども，僕自身は経済的な苦労というのは，直接的に経験していない。しかも，いわゆる進学校というところに入って，親にお金を出

してもらって，本土の大学，京都の大学まで出さしてもらっているという自分の状況というのを振り返ったときに，一世と呼ばれることへ，本当に一世なのかなという思いが，常にある。もしくはあったわけです。

で，説明してきましたように，やはり僕らの世代，いわゆる復帰後世代という捉え方をしたときに，僕らをウチナーンチュたらしめてる要素というのが，やっぱり徐々に沖縄現地で無くなっていってるんじゃないかな。もちろん沖縄の文化，食べ物。音楽，これは，もうブーム。そこまでやるかというほどのブームの中で，巷に溢れているわけですけれども。やはり苦労，苦難というところを備わったところでの，ウチナーンチュ的要素というのが，沖縄現地でも，もう徐々に少なくなってきてるんじゃないかなという認識が，僕にはあります。それは，沖縄が，戦後60年，復帰後30年あまり経って，本土への同質化というか，加速度的に進んでるんじゃないかなという思いとともにあるわけです。

そういう状況の中で，最近僕がふと思いついた，これは，ちょっと良いかも知れないなと思ったのが，僕ら若い世代というのは，もう一世ではなくて，例えば，0.9世，0.8世，0.5世。要するに，１未満なのではないかなという，何となく最近そんな気がするわけです。だから，その１が0.9になり，0.8になり，7，6，5，4とどんどん０に近づいている。これは，先ほどいった沖縄現地の本土，内地への同質化が進んでるということと，合わせて考えてもらえると多少イメージできると思うんです。だから最近僕は，0.5世なのか。0.6，0.7だと四捨五入すると１になるし，0.4，0.3だと四捨五入すると０になっちゃう。どっちなんや。そういう思いを，個人的に抱いているわけなんです。ちょっと冗談半分のように聞こえるかも知れませんけど，そういうふうな思いがあります。

それは，別に自分自身が根っからのウチナーンチュなのかとか，そういうふうなイメージの仕方をしているわけではなくて，要するに，ウチナーンチュに近かろうが，ヤマトゥンチュに近かろうが，ひとつ確かなことがあるんじゃないかなと。やはり，父母もしくはおじい，おばあから何とはなしに聞いてきた昔話。それは，沖縄戦の話であったり，戦後復帰までのいろんな話であったりですね。そういうのを聞くなかで，何ていうんですかね。沖縄の歴史というのが，例えば，教科書で読んで習うような，そういう抽象的，客観的なものではなくて，すごく具体的なものなんじゃないかなと，思う自分がいるということなんですね。

例えば，私の母方のおばあ。今，首里に住んでるんですけれども，小学校の先生をずっとしてました。もう今，90近いですけれども，女子師範学校を出まして教師をしていました。皆さんご存じのひめゆり部隊ですね。ひめゆり部隊の生徒たちを，教師として戦時中に送り出した。その当時のいろんな話，送り出したことに対するおばあさんの悔やみというんですかね，悔しさというのか，悔恨というのか，そういうものを聞く機会が，確かに僕は沖縄にいたころにあった。

一方，父方のおばあさん。戦後長く，基地の中で働いていたわけです。もちろん祖母の話からは，必ずしもネガティブな話だけでなくて，基地で働けばだいぶ収入が高かったとか，そういう話を聞いてきたわけです。一度，親父からですね。父親からドキッとする話を聞いたことがあります。復帰運動華やかなりしころですね。全軍労かなんかだったと思うんですけれども，組合がこう，うちのばあさんの家か職場か，なんか取り囲んだことがあったそうなんです。そ

れは，どういうことなのかっていうと，全軍労も，復帰運動に対して非常に精鋭的に取り組んでましたから，組合活動にあんまり参加しない僕のばあさんを，何ていうんでしょう，こう取り込むためのひとつの動きだったと思うんですけれども，旗を持った人たちが囲むわけですね。親父は完全にビックリして，「もう母さん，そんな無理して仕事せんで，組合活動やったらええやんか」と。「仕事せんでええやんか」というふうに頼んだ。ばあさんが答えたには，「私が仕事辞めたら，誰があんたを食わすんだ」と，そういうやり取りがあったそうなんですね。

そういうもろもろの話を，やっぱ思い起こすと，僕自身のアイデンティティがどうであるかというのを置いたとしても，僕自身がやっぱり否応なく，その歴史の中に身を置いているのではないかなと思うわけです。それが，単に本を読んだり，テレビを見聞きしてそう思うということではなくて，日常，常に生活して顔を合わせている父親，母親，おじい，おばあが，やっぱり経て来た体験なわけですね。

だから，仮に僕らが一世じゃなくて，0.5になり，0.3なり，限りなくどんどん0には近づいていくとしても，具体的な歴史を実感することによる具体的な想像力というのが，僕らにはまだ湧き得るのではないかなというふうに思うわけです。最後に，想像力ということでいえば，金城さんを含め，大阪に出てきたウチナーンチュの苦労ですね。彼らの歳をみてると，僕の父母と世代が一緒なんですね。僕の父も母も，沖縄で生まれ育って，沖縄で働いているわけですけれども，何か状況が違えば大阪に出てきていたかも知れないと思うわけです。で，やはり同じような苦労というのを，父母も，場合によっては経験した可能性が十分にあるのではないかと，僕の中に想像力が膨らんでいくわけなんですね。簡単にいえば人ごととは思えない。

で，ぼちぼち20分も経とうとしているんで，ちょっとまとめます。沖縄現地が未だに，米軍基地をはじめとするような問題を抱えているわけですけれども，僕自身は沖縄の抱える問題に向き合っていきたいなあというふうに思っています。それは，別に僕が何世であろうが，1だろうが，0.5だろうが，0.1だろうが，それはいいんじゃないか。親や祖父母のそういった経験を見聞きするなかで，何か芽生える思いというのがあるだろうなと。今，僕は新聞記者をやっているわけですけれども，沖縄現地で，その大阪のウチナーンチュの存在ってのは，やはりまだまだ認識されていない。沖縄現地からすれば，大阪に出ていった，もしくはヤマトに出ていったウチナーンチュの子どもや孫というのは，もうヤマトゥンチュというふうな見方さえされるわけなんです。ヤマトにおけるウチナーンチュの生きざまというのを，ヤマト社会に対して伝えていこうというのはもちろんですけれども，むしろそれを，僕は沖縄にもっとなんか伝えていくことができたらなと思います。それによって大阪，京都，関西とその沖縄をなんとかこうつなぐことができたら，記者という職業をしながらつなぐ役割を僕なりにできたら，もしくはしたいなというふうに最近思っているところです。ちょっと長くなりましたが，以上で終わります（拍手）。

城田　普段は記者として書く側にまわる新里健さんに，たっぷり20分お話をしていただきました。これでとりあえず，パネリスト4名の発表が終わりました。ここから20分オープンにして，会場の方々からのご意見，ご質問も含めながら，質疑応答あるいはユンタク・フォーラムに入っていきたいと思います。まず，パネリストで言い足りない部分がありましたら，どうぞ。質疑

応答の方に移ってよろしいですか。じゃあ，会場の方から。ぜひ，お願いしたいと思います。

城田　ロバートさん，お願いします。

ロバート仲宗根　この中で沖縄に住んでる人，ちょっと手を挙げてください。はい，わかりました。あとは大阪の人ですか。大阪以外の方は？わかりました。

おもしろい経験があります。ハワイに来るウチナーンチュは沖縄のことを知らない。ハワイに来る学生はね，沖縄のことをあまり知らない。そして，ハワイに来たら，まず沖縄のことを勉強して，やっぱり私はウチナーンチュと自覚するようになる。ハワイの県人会はそういう役割も果たしてきた。ブラジルではどうですか。与那嶺真次さん，どうですか。

与那嶺真次　皆さんこんにちは。私はブラジルの沖縄文化センターの会長です。沖縄県人会の副会長としても仕事をやっております。1978年から去年まで，沖縄県人会の一番若い役員でありましたけれど，今年初めて若い人が入ってきました。で，ブラジルの県人会に青壮年会というグループをつくりました。この青壮年会というものは，年輩の人たちが役員です。

まずは，一世と二世との会話がものすごく難しい。とくに，移民社会の中では先輩と後輩，親と子どもの会話がないという情景があった。まずは文化の違い。先輩の世代は，当たり前わかるんじゃないか，当たり前やるべきものをやってると主張する。教育をもっている子どもたちは子どもたちなりに論理の世界。そういう世代間の温度差があった。県人会はその温度差を埋める努力をしてきました。自分たちのおじいさんたちは，お金がなかったので精神性で動かないといけなかった。精神性というのは，夢をもつということ。もうひとつは心の助け合いです。子どもたちを教育して，自分たちは社会のことをやった。おじいさんたちは，県人会をつくるなどいろいろなことをやってくれました。そして，日本語を子どもたちに教えるために，学校を建てるために，県人会館ができました。

それで，私たちの一番の親しみであるサンシン（三線）が，移民社会では非常に活躍しました。他府県の場合は，自殺する移民の方々がたくさんいます。ただし，田舎の方のウチナーンチュは，あまり自殺していない。このサンシンというものが，ものすごい大きな活躍をやった。歌とサンシン。歌わないといけない。自分のストレスを流して，仕事が終わると，風呂に入って酒飲んで，サンシン弾いて，歌って。私たちの世代よりも年上の人たち，おじいさんたちが，サンシン弾いて歌っていた思い，一番心に残っています。

自分たちのじいさんが田舎にいるころ，何名子どもいるかとも聞かないで，街にいるウチナーンチュは生活をするために皆呼んでくれた。その時，私たちは10名。５名の子どもを抱いて田舎から街へ出てきて，先輩方が夢を与えてくれた。だから，今回のＷＵＢも大きな夢。夢があるというのは，各地域社会のおかげで，祖先という力が，まだその光が残っている。一人一人のウチナーンチュの心の中に。だから，私たち二世，三世，四世でも，何も沖縄のことをわからなくても，沖縄に初めて足を下ろすと，もう毛がたつ。涙も出る。どうして自分が泣いてるかわからない。その時に，沖縄にいる方々が，帰ってきたなという声をかけてくれると，やっぱり自分はウチナーンチュだなという意識がものすごく強くなってくる。

そういう関係で，現在ＷＵＢの組織が，こんなに大きくなることができた。自分たちの心の中に，まだウチナーンチュという意識をもって，各地域社会の中でウチナーンチュが結び合う。心をひとつにして夢を与え合う。だから，若い人たちもできるだけ移民社会の方に出てお世話になる，ただ留学して，ご飯お願いしてお金を払うだけではなくて，他人のところだけではなくて，同じウチナーンチュのところへ行って，食べるのももらって，たまに夢を語り合ったらいいと思う。お前こういうことやったらいいよ，ああいうことやったらいいよと。これをやっていく次第に，あんな小さな島から出て，私たちのじいさんたちが百年かかってつくった社会が，私たちの大きな結びになるんじゃないかと思う。皆さん，長く自分の挨拶をさせてもらって，どうもありがとうございました（拍手）。

城田　ブラジルからの与那嶺真次さんありがとうございました。はい，お願いします。

宮城弘秋　皆さん，どうもこんにちは。ロサンゼルスの宮城と申します。今しがたもお話があったんですけれども，皆さん若い人たちのお話を聞いていると，やはり，ウチナーンチュとしてのアイデンティティというか，それの感じ方というのは，我々海外に住む者と，沖縄に住んでる，そして日本に住んでる人たちと，ある程度の温度差があるというように感じます。

アメリカにおきましては，この人種の問題だとか，民族の問題，宗教の問題とすごくこうセンシティブというか，非常に，触れにくいテーマなんですね。その中でも僕は海外留学振興会といいまして，皆さんとほとんど同じような世代の日本や沖縄などから来る留学生の人たちと接してます。で，機会あるごとにですね，こういうウチナーンチュとしてのアイデンティティというテーマとか，それに近い話をするんです。

ある女の子，うちのレストランで働きました。その子はサウジアラビアで生まれ育ったんです。沖縄に行ったこともない。17歳でした。で，彼女が，僕にこういう話をしたんです。「ウチナーのサンシンを聞くと涙が出る」と。「涙が出る」という。僕はすごくよくわかった。僕は沖縄で生まれて，高校まで沖縄にいて，大学は東京で出ました。その後は，いったん出てしまったらなかなか帰らないという血を僕もひいておりましてですね，今，ロサンゼルスに住んでいる。沖縄にいる間は，沖縄の民謡とかサンシンの話は考えたこともなかった。その民謡に関しても，本当に興味ひとつ持ったこともなかった。しかし，アメリカで暮らすようになってですね，あのサンシンの音，民謡というのを聞くと，この奥深くから湧き出てくるウチナーンチュの，アイデンティティというか，ＤＮＡというか。これをすごく感じるんですね。

僕の娘，16歳。彼女はずっとアメリカで暮らしてます。お前はウチナーンチュだよ。お前，日本人だよ，といってきかせています。だからですね。何か悪いことをしたときにお尻をたたいたら，「アガーッ」と言いますよ。今我々の世代というのは三世。娘の世代になると四世になるんですね。これは，学生たちに話す僕の持論なんですけれども，どこで生まれ育っても，ウチナーンチュはウチナーンチュになる。日本人は日本人になる。三世になっても，四世になってもですね。自己紹介をするとき，話をするとき，アー　ユー　ジャパニーズ？しかし，日本に行ったこともない。日本語も話せない。しかし，自分は日本人であるという自己紹介の仕方をするんですね。やはり我々の生まれ持ってる血というか。やはりウチナーンチュ。

最後にちょっと，この学生たちの話をします。多少つながってくることです。嘉手納町の外語塾ですね。去年の12月終わりごろ，ＷＵＢのですね，この大阪会議の準備会のかたちをとって，ロサンゼルスで会議をしました。それで，その嘉手納町の外語塾の19歳，20歳の学生たちをですね，オブザーバーのかたちで10名呼びました。そして，女子学生から１人，男子学生から１人，並べて挨拶をさせました。すばらしい挨拶でした。自分たちは沖縄のことを考えたことがなかった。このロサンゼルスの会議の場で，アルゼンチンやら南米やら，いろんなところから集まったウチナーンチュの，世界で頑張ってるこのウチナーンチュの先輩方を見て，自分も沖縄に生まれたことをすごく誇りに思うと挨拶してくれたんですね。で，今後，自分もこのＷＵＢの先輩方のように沖縄のリーダーとなって，沖縄の架け橋となれるような人材になりたい。そういう挨拶をですね，この皆さんとほぼ同じ世代19歳，20歳の学生たちがやってくれたんですね。

やはり，海外に出るとですね。そのウチナーンチュとしてのアイデンティティというか，否が応でも感じさせられる，思わせられる，そして考えさせられる。これはなかなか日本にいては実感のできない感性です。そういう意味からしても，やはり海外に暮らしてる我々と，日本で生まれて育ってずっと暮らしている人たちとのアイデンティティに関する思いというのは，ある程度温度差というか，何ていうんですか，やはり多少は開きがあるような気がしています。ありがとうございました（拍手）。

城田　すいません。あと全体が10分ないんで，お願いします。

前川昌道　前川といいます。はじめまして。私はヤマトゥンチュです。愛知県出身。実をいいますと，ＷＵＢの大会があるから出たらどうですかと，東京の支部の方からお言葉をいただいたんですね。

そもそも私自身は，今日，何かウチナーンチュの世界に戻ったなというそういう思いをしている。沖縄の人から出席したらというようにウチナーンチュと同じ扱いをしていただいた。皆さんは，ウチナーンチュとして自分のアイデンティティを語られてますね。私は，ヤマトゥンチュでありながら，なぜウチナーの人たちと同じにされているかというと，これもまた大きな重要なテーマ。多分この逆が，ウチナーンチュの皆さんがヤマトであるいは世界で活躍されたときのベースは同じじゃないかなと思うんですね。そのアイデンティティの持ち方は，どんなものかということで，多分皆さんはウチナーンチュ，私はヤマトゥンチュで，皆さんとの何か同じ世界があるんでないかと思って，たまたま出席させていただいたなかで，お話をさせていただきます。

で，実はですね。私は沖縄で，２年４カ月勤めたんですね。ＫＤＤの沖縄支社長をやりました。その時に，次の任地が，ニューヨークでした。ＫＤＤの関連会社のニューヨークの社長で転勤したんですが，その時に，ニューヨークでは，県人会は愛知県人会じゃなくて，沖縄県人会に最初から入れてもらった。ですから，ヤマトゥンチュでありながら，実はウチナーンチュ扱いをしてもらって，かれこれ20年なる。20年経って，今日ここに，ウチナーンチュの皆さんの世界に，一緒にいさせていただいている。

多分ヤマトにおいて，先程，新里さんとか皆さんが言われてるように，いろんな苦労なさったなかで，ヤマトの社会にどう同化するのか，自分はウチナーンチュだというアイデンティティを持ちながらどう同化するかというのは，非常に重要な課題だったと思いますね。で，それについて私が思うのは，皆さんがマイノリティーになるのか，マジョリティーになるかの境は，ヤマトゥンチュか，ウチナーンチュなんていうことは関係ないだろうと思う。その人が，その地域で，まず存在感を認めてもらえれば，ヤマトゥンチュかウチナーンチュか関係なく，ウチナーンチュでも立派な人がいるんだね，じゃあ，ヤマトゥンチュと同じに扱おうじゃないかと。逆に私が，ヤマトから初めて転勤したときに，何て言われて転勤したかご存知ですか。

城田　前川さん，すいません。もう時間が。

前川　はい，わかりました。実は，死んで帰るかも知れないといわれて赴任したんですね。世界のウチナーンチュ大会のキャンペーンを実は，沖縄でやったんです。で，その時，沖縄県の祖国は誰も海外で活躍しているウチナーンチュにネットワークもなく支援もしていなかった。ところが，ウチナーンチュ大会を契機にＷＵＢができて，今はネットワークができてる。県からの支援もあって交流がはかれるようになった。こういう世界に変わったんですね。そこんところが非常に重要だ。それまで，もう20年前は何もなかったんですね。

城田　はい，わかりました。今，宮城さんの血かＤＮＡかとか，前川さんのいろんなお話が出てきたところなんですけど，いよいよ盛り上がってきましたが，どうしましょうか。

町田　次のユースプログラムの方もありますので，ちょっと休憩をはさみます。

城田　このフォーラムあと３分あるんで，ちょっと締めくくりを。まず先生，なにかおっしゃいますか。

町田　今さっき，ブラジルの与那嶺真次さんにもいろいろと話をしてもらいました。最近，沖縄ではこういう話もあります。「本当(フントー)ぬ沖縄(ウチナー)や，なー，沖縄(ウチナー)んかえー，無(ネー)らん。本当(フントー)ぬ沖縄(ウチナー)や，ブラジルんかいどぅある」というふうな話ですね。つまり，沖縄(ウチナー)には沖縄(ウチナー)がない。本当の沖縄(ウチナー)はブラジルに残っているというものです。言葉にしてもそうです。逆にいえば，沖縄に住んでるから沖縄人(ウチナーンチュ)といえるのか。それは，そうなんでしょうけれども，海外にいる人たちからたくさん学ぶことが，多分沖縄に住んでる人たちにもあるだろうと思います。そういう意味ではですね。これからまだ時間はありますので，沖縄に住んでいる人，大阪に住んでいる人，あるいはアメリカ，海外に住んでいる人，それぞれの立場で話すなかからですね。我々って一体何だろうというのをたくさん学べたら，今日はいいなと思います。

金城　すいません。私，後半は仕事があるもんで，ここで失礼するんで，最後に一言だけ。私は高校で17年勤務してて，今は地域で小中学生を学習塾というかたちで指導しているんですが，

時々，高校，中学校，小学校に，地域の話とかあるいは沖縄の話とかということで，呼ばれて講演に行ったりするんです。

今，学校の先生や日本社会のお父さん，お母さん方が一番こう必要としているものというのが，先ほどおっしゃった方もいらっしゃるんですけれど，親子の対話とかですね。おじいさん，おばあさん二世代間の対話とか，それがものすごく不足しているし，それに日本社会が危機感を感じているのは間違いないんです。それに対して，私なんかが今日話させてもらったことなんかは，自分の身近な人から聞いたことを，ただ伝えてるだけなんですが，それが貴重だと言われます。これはまさに，ウチナーンチュが意識する，しないに関わらず，ウヤファーフジから伝えられてきたことを，そのまま自分の記憶の中に留めて，それをまた，子どもたちに伝えているというそのひとつのシステムが，長い歴史のなかに有ったことだと思うんですね。日本という社会は，明治以降の百年以上の間に，それをいっきにパーっと切り取られたような気がしています。非常に個人的な意見ですけれども。

で，それをマスコミなんかがタレントを使い，あるいはいろんな情報を使うことで，沖縄にその良さが残るということで，今，ものすごく沖縄がもてはやされているという状況があると思うんでね。そういう意味では，私は二世ですので，日本社会に50%，沖縄にも50%ぐらい愛着を持っていますので，できれば日本社会にいる，あるいは世界にいるウチナーンチュが，本質的に持っている親子や世代を越えた対話とか，そういう関係を，もっともっとそれぞれの地域で広げていただきたいなと思います。以上で。私，後半参加できないんですけど，ぜひ有意義な交流をしていただきたいと思います。ありがとうございました（拍手）。

城田　仲間さんはどうですか。新里さんは。

新里　ちょっと一言だけ，言い足りなかったというか。先ほど，僕想像力という言葉を使ったわけですけれども，その，この想像力というのが，単に本土に出てきた沖縄出身者だけではなくて，僕がその大正区の一世，二世から聞いた話の中にもあったように，やはりその在日コリアンだったり，あるいは部落の方々であったり，そういった方々をめぐる状況と関連あるいは類似していることが非常にたくさんあるんですね。これは，僕が大正区で話を聞くたびに，いつもそう実感するわけです。ひとつ言いたいのは，沖縄出身者ということだけではなくて，そのほかのマイノリティーをめぐるその状況にも，想像力をやっぱり働かせていくというのが，必要なのかなというふうに思います。というのも，今日のテーマが「在日ウチナーンチュ」という，これまであまり使われたことのなかった言葉なわけです。やはり「在日」という言葉を頭につけるとですね。在日朝鮮人，在日韓国人というのが僕らの頭の中にあると思うんですけど，沖縄現地に住んでいる人たちの中には，それと一緒なのかなというイメージを持つ者も当然いると思う。で，本土に出てきたウチナーンチュの人たちを，なかなかイメージできないところがあると思うんですけれども，なぜ「在日」という言葉が頭についているのかということの意味を，皆さんにも，若い人たちにも考えてもらえたらなと思いました。すいません。長くなりました。

城田　ありがとうございました。じゃあ，簡単にまとめます。今回は「在日ウチナーンチュ」

という新しい言葉，琉大の仲程［昌徳］先生の一言で決まったタイトルで話をさせていただきました。今回のフォーラムをまとめると，新里健さんのお言葉だと，そのウチナーンチュたらしめているものは何なのかという共通のテーマがあって，それは，具体的な想像力がいく父母や祖父母の歴史であるとか，ご自身の体験である。言葉である。あるいは職場での仕事でもある。あるいはＤＮＡであるとか，いろんなレベルがあると思うんですね。それは，在日だけの枠からもちろん飛び出してしまって，いろんな答えがあるってのがおもしろい，ユニークなところだなーと思いました。で，後半がですね，ユースプログラムの方では，大阪，日本だけに限らずハワイやアメラジアンのお話も交えて，そのウチナーンチュたらしめているものは何なのかってものを，もう少し違った視点からもみて，もう少しユンタク・フォーラムが続ければいいなーと思ってます。とりあえず，前半はここで終了いたします。どうもありがとうございました（拍手）。

※ロバート仲宗根氏、与那嶺真次氏、宮城弘秋氏、前川昌道氏のご発言については、移民研究センターでまとめさせていただきました。よって文責は当センターにあります。よろしくご了承ください。

報告をするパネリスト

フォーラムのスタッフ一同